

## 開催報告

2015年6月24～25日 場所：キャノングローバル戦略研究所

「同盟の比較研究プロジェクト」ワークショップ

**Global Allies: Comparing Alliances in Europe and Asia**

主催：キャノングローバル戦略研究所・豪国立大学

協賛：北大西洋条約機構(NATO)

当プロジェクトは、アジア太平洋地域と欧州における米国との同盟関係を比較しつつ、現代の同盟の意義と変容を分析し、地域安全保障秩序の動向を見定めることを目的としています。本プロジェクトには欧州からドイツ・デンマーク・ノルウェー・ポーランド、アジアから日本・韓国・タイ・オーストラリアの計8カ国の代表からなる研究チームを形成し、各国の対米同盟管理についての諸論点がどのように影響を与えているのかを分析し、21世紀の同盟のありかたを検討します。

マイケル・ウエスリー (Michael Wesley) 豪国立大学教授は基調講演にて、21世紀の同盟が直面する課題を①米国の圧倒的パワーが後退した後の秩序形成の中核となりうるか、②台頭する新興国やトランスナショナルな脅威に対応できるか、③同盟国が(米国に代わり) 能動的な秩序構築のための行動をとれるか、④民主主義や法の支配といった価値を深化・拡大する母体となりうるか、といった課題を提示しました。これらをアジアと欧州の同盟国に共通する課題として、比較研究することの重要性が強調されました。

第1回ワークショップは、以上の問題意識に基づき、テーマ別のセッションを構成し、欧州とアジアから1カ国ずつ研究報告を行う形式で実施されました。第1セッションは「要石としての同盟(Linchpin Allies)」としてのドイツと日本、第2セッションは「海洋同盟(Maritime Allies)」としてのノルウェーとオーストラリア、第3セッションは「起業家的同盟(Entrepreneurial Allies)」としてデンマークと韓国、第4セッションは「岐路に立つ同盟(Alliance at Crossroads)」としてポーランドとタイを取り上げました。

ワークショップの議論を通じて、欧州とアジアには上記課題に対する多くの共通性を見いだすことができたと同時に、地政学的・制度的差異に起因する差異を確認することもできました。第2回のワークショップは来年初頭にドイツ・ベルリンで開催する予定です。第1回の議論の成果を基盤として、ドラフト原稿を議論し、最終的には学術書籍として出版する予定です。